

いのはなトンネルの惨事

大津 隆文

去る七月、高尾山近くのバス停で一枚の張り紙に気付いた。それは「いのはなトンネル銃撃事件」の慰霊祭開催の知らせだった。読んでみると、終戦間近の八月五日、高尾駅を出た長野行き八両編成の列車が、近くのトンネル手前で米空軍のP51に襲撃された事件。列車は超満員で機関車と客車一両半がトンネルに入ったところで停車、乗客は繰り返し銃撃にさらされ、五十二名死亡、百三十三名重軽傷という、列車銃撃では国内最大級の大惨事となった。

私は八月七日に慰霊碑を訪ねたが、前々日に供えられた花束、千羽鶴が夏の暑い日差しに耐えていた。また、日向は暑かったが周りには木槿が花を付け、木陰では風が涼しくしばらく往時を偲んだ。

日本が制空権を失って以降は米軍機が思いのまま本土を蹂躪していた。下校途中に艦載機の銃撃を受け溝に飛び込んで命からがら助かった、という体験談は時々耳にした。攻撃する側は兎狩でもしているような心境だったのだろうか。

軍人以外の一般市民(文民)への攻撃は当時であっても国際法違反である。あの無差別な殺戮行為である三・一〇東京大空襲は、どうやって正当化できるのだろうか。原爆投下については、日本政府も直ちに国際法違反との訴えを起こしていた。現在「法による正義」を声高に唱える人達は、過去の所業に心の翳りは感じないのだろうか。

こうした相手の不当、不正な行為の責任追及という点で、日本人は一般的に余り厳しくないように感ずる。いくら相手を非難したところで死んだ人が戻ってくる訳ではない、むしろ穏やかな気持で慰霊してあげた方が彼等の無念も癒やされる、そんな宗教観、人生観が定着しているのだろうか。「恵沢は水に刻み、恨みは岩に刻む」という隣国の言い伝えとは大きく異なっている。

厳しい責任追及が同種の事件の再発を防ぐのは確かである。だがそれには大変なエネルギーと時間を要する。とすれば私達に出来ることはせめて事件を後世に語り伝えていくことも知れない。